日本現代詩大系　第二巻

詩型の自然陶汰は、近代詩前期としての独特な新體詩調を定着させ、バイロン、ハイネに代表される西欧浪漫精神を母体とした七五調の旋律が、個々の感性を経るや様々な変奏を響かせた。藤村、鐵幹、晩翠、醉茗、泡鳴等、明治浪漫詩人を収録。

日本現代詩大系

第二巻

河出書房新社

日本現代詩大系　第二卷

編集

日夏耿之介
山宮　允
矢野峰人
三好達治
中野重治
大岡　信

昭和四十九年十月二十五日印刷
昭和四十九年十月　三十　日發行

編　者　日夏耿之介
發行者　中島隆之
印　刷　中央精版
製　本　中央精版
發行所　河出書房新社
東京都千代田區神田小川町三ノ六
電話(〇三)(二九一)(三七一一)
振替　東京一〇八〇二

目次

逍遙遺稿 抄……中野逍遙 二
Seen and Unseen 抄……ヨネ・ノグチ 一三
The Summer Cloud 抄……ヨネ・ノグチ 一四
花紅葉 抄……鹽井雨江・武島羽衣・大町桂月 一五
暗香疎影 抄……鹽井雨江 二八
黄菊白菊 抄……大町桂月 五〇
霓裳微吟 抄……武島羽衣 五三
この花 抄……杉烏山 六一
「帝國文學」詩人抄……中内蝶二・小日向是因・藤井紫影
夏目漱石・石倉後凋子 六六
若菜集 全……島崎藤村 七七

夏草 抄……島崎藤村 一三七
落梅集 抄……島崎藤村 一三九
藤村詩集序文……島崎藤村 一四一
鐵幹子 抄……與謝野鐵幹 一四三
紫 全……與謝野鐵幹 一四七
うもれ木 抄……與謝野鐵幹 一八三
毒草 抄……與謝野鐵幹 一八八
槲之葉 抄……與謝野鐵幹 一九〇
鴉と雨 抄……與謝野鐵幹 一九四
松蟲鈴蟲 抄……三木天遊・繁野天來 一九七
古白遺稿 抄……藤野古白 二〇九
愛吟 抄……內村鑑三 二一三
抒情詩 全……國木田獨步・松岡國男・田山花袋
太田玉茗・矢崎嵯峨之舍・宮崎湖處子 二一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

山高水長 抄……國木田獨歩・田山花袋・宮崎湖處子・佐佐木信綱
石橋愚仙・松岡國男・繁野天來・太田玉茗 三一三
獨歩詩集 抄……國木田獨歩 三四〇
かぶら矢 抄……池皐雨郎 三四二
風月萬象 抄……山田枯柳・山本露葉 三四三
天地有情 全……土井晩翠 三四九
曉鐘 抄……土井晩翠 四〇七
東海遊子吟 抄……土井晩翠 四一五
曙光 抄……土井晩翠 四一六
有明月 抄……瀧澤秋曉 四一七
野人 抄……清水橘村 四一八
夏ひさし 抄……清水橘村 四二三
筑波紫 抄……清水橘村 四二三
詩美幽韻 抄……葉末露子 四二六

青海波 抄……長谷川春草・葉末露子・清水橋村 四三〇
無弦弓 抄……河井酔茗 四三六
塔影 抄……河井酔茗 四三八
玉蟲 抄……河井酔茗 四四三
霧 抄……河井酔茗 四四六
夕潮 抄……岩野泡鳴 四四七
悲戀悲歌 抄……岩野泡鳴 四四八
闇の盃盤 抄……岩野泡鳴 四五一
小百合集 抄……吉野臥城 四五五
野茨集 抄……吉野臥城 四五六
ハイネの詩 抄……尾上柴舟 四五九
銀鈴 抄……尾上柴舟 四六一
金帆 抄……尾上柴舟 四六二
青春之詩 抄……敬天牧童今村良治 四六三

舶來すみれ 抄……敬天牧童今村良治 四六六
夕紅葉 抄……久保天隨 四六九
花ざくろ 抄……國府犀東 四七〇
東天紅 抄……筒井菫坡 四七四
解　説……日夏耿之介 四七七
作者作品及び起句目次……五三一

凡例

一　本巻に收載した詩書の多くは既に稀覯本となり、今日容易にそれを觀ることができないため能ふ限り原型を保存することに努めた。從つて抄出を餘儀なくされた詩書の目次はすべて各その冒頭に掲げ、收載作品の全貌を窺ふに便とし、重要なる序文・跋文は紙幅の許す限り採錄した。

一　それぞれ文末に發行年月日・發行所名・判型・頁數および定價を記し詩書の形態を推測するに便ならしめた。記載中菊半截判（五・九×四・六）等の表示の括孤内の數字は縱五寸九分横四寸六分の謂であり、序文・目次等の頁數が奇數で終つてゐるのは裏白を含むの意を示したものであり、上製・並製本の呼稱は前者はボール厚表紙本綴を、後者は紙裝薄表紙あるひはフランス裝等を表すものである。また序文・目次・本文等の頁數の記載の順序は各書の構成の次第による。

一　排次は原則として同一作者の下にその作者の詩書・詩篇を一括し、單行詩書の發行年代順に配列する方針をとつたが、必ずしもすべてこれに機械的に從ふことなく新詩形成の史的發展を鳥瞰できるやう注意を拂つた。

一　合著もしくはアンソロジーは、分解して各作者の下に詩篇を蒐める方針はとらず、それをもとにして排列した。從つて作者の出頭が前後する場合を生じたが、詩書原型保存の趣旨を重くみたためである。

一　収載した詩篇は一二の例外を除きすべて初校本を底本として用ひたが、能ふ限り初出雑誌・流布本・全集本等をも参照した。

一　原本において脱落と認められる文字は（　）を附して補つた。

一　文法・假名遣（歴史的）・句讀點・段落なども整理せず、作者の意圖するところと表現上の趣味・慣習及びそれらによる時代的ニュアンスを保存するを旨としたが、印刷上の誤りと認められるものはこれを訂正し、且つ現行と異る用字及び疑問ある個所のわきにはママを添へた。但し同一作者の同一誤謬には煩を避け初めの一語に添へるにとどめた。

一　漢字のふり假名は二様に讀めるもの・まぎらはしいものだけ原本のふり假名の中から採り殘したが、音・訓とも全部に亙り字音假名遣・歴史的假名遣によつて訂正した。混亂を避けるためである。また原本には附されてゐないに拘らず、前後の關係上必要と認めたものには推定したふり假名を（　）をつけて附け加へた。なお圏點を多く附する作者の筆癖はすべて保存した。

一　巻末に作者作品及び起句目次を附して索引に便した。作者の排次は本巻出頭の順に従ひ、同一作者のもとにその詩篇をすべて一括した。但し與謝野鐵幹「紫」中の短歌はこの目次より除いた。

一　本書編纂の資料は主として衣笠靜夫氏の藏書に據る。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

第二卷　浪漫期（上）

逍遙遺稿

中野逍遙
（重太郎）

〔譯文は「譯文逍遙遺稿　笹川臨風・金築松桂」岩波文庫本による〕

思君十首

思君我心傷、思君我容瘁、中夜坐松蔭、露華多似淚、
思君我心悄、思君我腸裂、昨夜涕淚流、今朝盡成血、
示君錦字詩、寄君鴻文冊、忽覺筆端香、窓外梅花白、
爲君調綺羅、爲君築金屋、中有鴛鴦圖、長春夢百祿、
贈君名香篋、應記韓壽恩、休將秋扇掩、明月照眉痕、
贈君雙臂環、寶玉價千金、一鐫不乖約、一題勿變心、
訪君過臺下、清宵琴響搖、佇門不敢入、恐亂月前調、
千里囀金鶯、春風吹綠野、忽發屋頭桃、似君三兩朶、
嬌影三分月、芳花一朶梅、渾把花月秀、作君玉膚堆、
書聲入機聲、鶯語交笑語、春風八百街、與君住何處、

君を思うて我が心傷み。君を思うて我が容瘁す。中夜松蔭に坐せば。露華淚よりも多し。」
君を思うて我が心悄し。君を思うて我が腸裂く。昨夜涕淚流る。今朝盡く血と成る。」
君に示す錦字の詩。君に寄す鴻文の冊。忽ち筆端の香しきを覺ゆ。窓外梅花白し。」
君の爲めに綺羅を調へ。君の爲めに金屋を築く。中に鴛鴦の圖有り。長春百祿を夢む。」
君に贈る名香篋。應に韓壽の恩を記すべし。秋扇を將つて掩ふを休めよ。明月眉痕を照す。」
君に贈る雙臂の環。寶玉價千金。一鐫約に乖かず。一題心を變ずる勿れ。」
君を訪うて臺下を過ぐ。清宵琴響搖ぐ。門に佇んで敢て入らず。月前の調を亂さむことを恐る。」
千里金鶯囀り。春風綠野を吹く。忽ち發く屋頭の桃。君に似たり三兩朶。」
嬌影三分の月。芳花一朶の梅。渾べて花月の秀を把り。君の玉膚の堆と作さむ。」
書聲機聲に入り。鶯語笑語を交ふ。春風八百街。君と何の處に住まむ。」

道情七首

擲我百年命、換君一片情、仙階人不見、唯聽玉琴聲、
長安市中水、總是卓姬香、染上相如筆、文章萬丈光、
與君住瑤臺、與君分鏡面、欲共百年春、階前花片々、
雙燕巢朱屋、兩鴛棲碧池、上曰共不老、下曰長相思、
東嶺半輪月、西廂一抹雪、或比君眉清、或比君肌潔、
紅豆了前契、綠絲繫後緣、花願長生樹、水思不老泉、
我有菱花鏡、贈君示意濃、猶向夜夢裡、分明得相逢、

我が百年の命を擲ち。君が一片の情に換ふ。仙階人見えず。唯玉琴の聲を聽く。」
長安市中の水。總べて是れ卓姬の香。染め上す相如の筆。文章萬丈の光。」
君と瑤臺に住み。君と鏡面を分つ。百年春を共にせむと欲す。階前花片々。」
雙燕朱屋に巢ひ。兩鴛碧池に棲む。上に曰ふ不老を共にせむと。下に曰ふ長く相思はむと。」
東嶺半輪の月。西廂一抹の雪。或は君の眉清に比し。或は君の肌潔に比す。」
紅豆前契を了し。綠絲後緣を繫ぐ。花は長生の樹を願ひ。水は不老の泉を思ふ。」
我に菱花の鏡有り。君に贈りて意の濃かなるを示す。猶ほ夜夢の裡に向つて。分明に相逢ふを得む。」

〔「逍遙遺稿」正編外編・中野重太郎著。宮本正貫、小柳司氣太編。明治廿八年十一月十六日、不破信一郎發行。體裁・菊判和裝。口繪著者肖像、遺墨一頁。題字六頁・伊達宗德、島田禮（篁邨）、序四頁・岡本監輔、張滋昉（蘅芻）、著者小傳二頁、例言一頁、本文正編九十頁、外編百頁、雜錄二十四頁。非賣品〕

Seen and Unseen　　by Yone Noguch

ALONE

Alone!
Though the heaven above break down;
though the earth spreads around—
apart, alone, not even with my own
shadow in the world of darkness; with only my

withered soul, housed in the tear-rusted body,
As a motherless wind in breathless vale, as a funeral bell stealing down into the unvisible world by a dream-muffled path.
Alone with my my own loneliness, with my own reverie.
Alone in this ghost-raining night, my cabin walls dying like formless corpses into the darkness of vacuity.
Alone in this bonndless universe, closing my mortal eyes; yet, under the radiant darkness, I am ever awake to the sheeted memory of the past.
Alas, my almost decayed soul picked by the incessant tear-rains, my one desire is to be myself as nothing.

ALAS, NOTHING!

Alas, nothing!
Wisdom gives the way to untruthfulness:
Hope gives the way to feeble wisdom.
What talk, about Goodness, Badness, Success
Unsuccess, Virtue, Vice!
Like dreams amid dreams, our lives in this floating world.
Storms of vanity-winged hope, be silent!
Alone, abroad, I lost at last my way out of sight in misty doubtfulness.
While hunting the doorless entrance of Hope, my fingers were all bloodied by rose-thorns!
The cold-hearted sun couldn't kill my dew-tears ever shed under spirited sorriness—ever dreaming of the ideal romance.
Alas, my own frozen dews!—formed times ago, in the mileless West, when the sword-handed hopes swept me apart from my brother,—far away!

〔First Edition Rublished by Gelett Burgess & Porter Garnett, 1897. Reprinted by Orientalia, 1920 (Five Hundred copies of this second edition printed for Orientalia 22 East 60th Street New York in the month of November 1920.
B 6 和横綴，所收詩50篇〕

THE SUMMER CLOUD

by Yone Noguchi

SPRING

My memory of Winter faded in kisses of golden breeze: my heart began to stir. I am a worshiper of "To-day" (To-day in the Temple of youth), my eyes are large for vision of beauty, my feet light after the shadow of Love: I alone wandered in the cherry forest. What light in the trees! Are the moonbeams gathering here,—the moonbeams, the sweet breath formed? Or are they the visible poetry singing in odor? The flowers with lips apart are scattering their loves to the four winds: I am drinking the beauty and mystery. My sleeves of fancy cast away the worldly dusts: I said farewell to my comrade, a long ago, and I made friendship with the clouds —the clouds flying downward to dig out their hidden dreams and ecstasy: the white feet of the clouds are my fancy's feet. I bade my fancy to rise with the cherry's odor up to the skies for the secret home of the gods, and again to run down with the river, singing the song of Spring,—the season of red bosom of Love. O Spring of Life and sunlight! O Spring with her shadowy arms of gossamer! O Spring with the breath of angels! In the breath I find my life new and true. O Spring! What Peace of the forest! O Temple of Beauty which is mystery! What longing is in my soul! What noble longing of the flowers! And it is noble to fall serenely unto the ground, when Fate of wind passes by: Death is sweeter than joy, higher than Love. Oh Sleep, unite Dreamland and the land of poesy! I will sleep under the trees, this night.

〔夏雲〕野口米次郎著。明治三十八年二月十一日春陽堂發行。體裁・四六判和裝。頁ごとに色刷木版の草花を配す。口繪（彩色）一葉。序文五頁、目次五頁、本文二二二頁。定價七十五錢〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.